

〈研究ノート〉

インド社会の英字新聞は、1911年インペリアル・ダーバー100周年をどのように回想したのか

本 田 毅 彦

はじめに

本稿では、2011年前後の時期にインド社会の主要な英字新聞に現れた、1911年インペリアル・ダーバーに関わる記事を整理し、通観したい¹⁾。2011年は、同イベントが行われてから100年目にあたっていた。そのような節目に際して、インド社会の人々がそれをどの程度、また、どのようにして回想したのかを確認し、その含意について考察することが目的である。

インペリアル・ダーバーとは、英領インド帝国において19世紀末から20世紀初頭にかけて三度行われた大規模な政治儀礼であり（1877年、1903年、1911年に行われた）、その趣旨は、新たなイギリス国王＝インド皇帝が即位した事実を広くインド社会の人々に告知することだった²⁾。しかし両大戦間期には、二人の新たなイギリス国王＝インド皇帝が誕生したものの、インド社会における独立運動の高まりから同儀礼がボイコットされる可能性が高かったため、その実施が回避された³⁾。しかし、1911年インペリアル・ダーバーに際してカルカッタ（現在の名称は、コルカタ）からデリーへの遷都が宣言され、その結果、ニュー・デリーが造営されることになった⁴⁾。ニュー・デリーは、インペリアル・ダーバーを含む大規模な政治儀礼を行うための恒常的な舞台として構築された側面が強く、事実、1947年のインド独立以後も、インド共和国の国家儀礼のためにニュー・デリーは利用され続けている⁵⁾。

1911年インペリアル・ダーバー100周年（2011年）前後の時期に焦点を合わせ、インド社会の人々が同イベントをどのように回想したのかを整理することが有益なのは、と筆者が考えるに至った理由は、以下のとおりである。1911年以降2011年までの100年間に関して、

- 1) イギリスの国営放送であるBBCによれば、2012年1月の時点で、インドでは7万の新聞が発行されており、毎日販売される新聞の総部数は1億で、世界最大の市場だった。Soutik Biswas, 'Why are India's media under fire?', *BBC News*, 12 January 2012.
- 2) 本田毅彦「英領インド帝国絶頂期の政治儀礼とメディア」『メディア史研究』39号、2016年、99-121頁。同「1903年インペリアル・ダーバーにカーゾンが託した夢」『帝京史学』30号、2015年、455-522頁。同「1911年デリー・ダーバーとジョージ五世—国王＝皇帝によるインド社会との対面的コミュニケーションの試み」『史窓』75号、47-65頁。
- 3) 本田毅彦「最後のデリー・ダーバーはなぜ回避されたのか—1930年代後半の英領インドをめぐる諸情勢」『史窓』78号、75-99頁。
- 4) Rudrangshu Mukherjee, 'Old Seat for a New Empire: Calcutta to Delhi', Malvika Singh and Rudrangshu Mukherjee, *New Delhi: Making of a Capital* (New Delhi: Roli Books, 2009), pp. 17-27.
- 5) 本田毅彦「「インド共和国の日」とデリー・ダーバー」『帝京史学』25号、2010年、109-139頁。

インド社会の英字新聞は、1911年インペリアル・ダーバー100周年をどのように回想したのか

インド社会の歴史には、1947年（インド独立の年）をはさんで二つの時代が存在する。すなわち、1911～1947年の英領インド帝国時代（36年間）と、1947～2011年の独立インド時代（64年間）である。1911年インペリアル・ダーバーは、絶頂期の英領インド帝国が行った、同帝国にとって最も重要な政治儀礼だったが、それから100年が経過した2011年という時期は、歴史上のエピソードとして同儀礼を回想するのにとどまらず、それを契機として、インド共和国の視点から、その前の時代（英領インド帝国の時代）との連続／不連続について考察するための適切なタイミングだったように思われる。英領インド帝国が解体し、それと同時に独立インドが誕生してから60年以上の時間が経過したことによって、「前の時代」と「今の時代」の双方に関して客観的、総合的に論じることができるようになっていたのでは、と考えられる。

具体的な作業としては、2000年から2012年までの時期について、インド社会で発行されている主要な英字新聞の記事をウェブ上で検索し、主として Imperial Durbar, Delhi Durbar に言及しているものを取り上げ、分析を行った。インド社会では独立後も英語が主要な公用語の一つとして認められ、用いられ続けていることもあり、英字新聞の社会的影響力は大きい⁶⁾。しかし本稿の調査の対象が英字新聞に限られたのは、ひとえに筆者の言語能力の限界に由来する。ヒンディー語新聞などについての分析は、可能であれば共同研究者などを得た上で、他日を期したい。

収集することができた記事は、おおまかに三つのカテゴリーに分類することが適当だと考えられたため、本稿ではそれら三つのカテゴリーに対応させる形で三つの節を構成した（インペリアル・ダーバーの「現況」、インペリアル・ダーバーの「記憶」、インペリアル・ダーバーとゆかりを持つ人々）。それぞれの節の中では、さらに複数のテーマへ記事を分類し、時系列に沿って検討を行っている。

1 インペリアル・ダーバーの「現況」

コロネーション・メモリアルの状態、関連するイベントの開催

まず、1911年インペリアル・ダーバーに関係する、インド社会の「現場」の状況を伝える記事について見ていきたい。インペリアル・ダーバーが行われた会場跡である「コロネー

6) 2009年5月の時点で、インド社会において最大の読者数を持つ英字新聞は『ザ・タイムズ・オヴ・インディア (The Times of India)』だった (1334万7千部)。同紙に続く主要な英字紙としては、『ザ・ヒンドゥスタン・タイムズ (The Hindustan Times)』 (634万1千部)、『ザ・ヒンドゥー (The Hindu)』 (537万3千部)、『ザ・テレグラフ (The Telegraph)』 (281万8千部)、『デカン・クロニクル (Deccan Chronicle)』 (276万8千部)、『ジ・エコノミック・タイムズ (The Economic Times)』 (191万7千部)、『ミッド・デイ (Mid-Day)』 (158万3千部)、『ザ・ニュー・インディアン・エクスプレス』 (156万6千部)、『ムンバイ・ミラー (Mumbai Mirror)』 (155万7千部)がある。'IRS R1 2009: No surprises here - Dainik Jagran and TOI maintain leadership positions', *exchange4media.com*, 8 May 2009.

ション・メモリアル・パーク」の状態についての記事，1911年ダーバー100周年に際して，それに関わって，どこで，どのようなイベントが行われるのか（行われたのか）を報じた記事などである。

2001年1月には、『ザ・ファイナンシャル・エクスプレス』が「ザ・ダーバーにおける空間」と題して，デリーの「インペリアル」ホテルのバー・ラウンジについての記事を掲載していた⁷⁾。「インペリアル」は20世紀前半に建設され，現在もデリーで最も格式が高いとみなされているホテルであり，インド社会の富豪，政治家，映画スターたちがデリーに滞在する際に利用することで知られている。そして，インド社会の各界エリートが夜な夜な集う同ホテルのバー・ラウンジの名称が「ザ・ダーバー」であり，名称だけでなく，同ホテルが建築された20世紀前半の英領インド帝国のエリート社会の豪華な雰囲気，そのままの形で維持している。さらに同ホテルは，バー・ラウンジだけでなく，建物の廊下や階段などにもインペリアル・ダーバーを主題とする数多くの絵画や写真を飾り付けており，さしずめ，ホテル全体がインペリアル・ダーバーを主題とする博物館でもあるかのような雰囲気を醸し出している。

1911年ダーバー100周年にあたる2011年に入ると，同ダーバーに関係するインド社会の「現場」の状況を伝える記事が数多く登場するようになった。1月，7月，12月に，それぞれ『ヒンドスタン・タイムズ』，『インディアン・エクスプレス』，『デカン・ヘラルド』が，インペリアル・ダーバーの会場だったコロネーション・メモリアル・パークの状況について伝える記事を掲載している⁸⁾。

1911年ダーバーの最重要の儀式（イギリス国王＝インド皇帝ジョージ5世に対して，藩王たちが忠誠を誓う）が行われたのが12月12日だったために，2011年12月半ばには『デカン・ヘラルド』と『パイオニア』が，1911年ダーバー100周年にちなんでどのようなイベントが催されつつあるのかを紹介する記事を掲載した⁹⁾。また12月16日には，遷都以後のデリーの歴史を想起させる絵画を集めた展覧会について，『ジ・エイジアン・エイジ』が紹介している¹⁰⁾。

さらに12月16日には『パイオニア』が，また18日には『ザ・トリビューン』が，デリーへの遷都100周年を記念するために何らかの土木工事を行うべきなのでは，との提案を行った。『パイオニア』はデリーに国立図書館を設けるべきだとし，『ザ・トリビューン』は，デリー市を貫流するヤムナ河の河岸を整備するべきだと主張していた¹¹⁾。

7) Vidya Deshpande, 'A space in the Durbar', *The Financial Express*, 30 January 2001.

8) 'Capital shift coronation', *Hindustan Times*, 3 January 2011; Sweta Dutta, 'Coronation Park won't be ready by Delhi Durbar's 100th year', *Indian Express*, 25 July 2011; Anirban Bhaumik, 'George V and Rajan: Tale of two 'Kings'', *Deccan Herald*, 10 December 2011.

9) 'Host of events lined up as Delhi turns 100', *Deccan Herald*, 11 December 2011; 'Timeless Delhi', *Pioneer*, 16 December 2011.

10) 'Rare paintings trace capital's history, legacy', *The Asian Age*, 16 December 2011.

11) 'We should have a National Library in New Delhi', *Pioneer*, 16 December 2011; Ira Pande, 'Celebrating the spirit of New Delhi', *The Tribune*, 18 December 2011.

インド社会の英字新聞は、1911年インペリアル・ダーバー100周年をどのように回想したのか

2011年の年末が近づいた12月25日には『ザ・トリビューン』が、デリーへの遷都100周年を祝うイベントが翌2012年も続く、と述べていた¹²⁾。他方、12月30日には、『ザ・タイムズ・オブ・インディア』が、「1911年ダーバー100周年は、ほぼ、何の記念行事も行われずに過ぎ去った。来年〔2012年〕が、デリーが首都となってから100周年なので、文化省は何らかのイベントを行うと言っている」と記していた¹³⁾。

出版企画

2011年が近づくにつれて、徐々に、1911年ダーバーに関わる書物が出版されるようになり、そうした書物を英字新聞が紹介あるいは書評することになった。2001年2月には、オックスフォード大学出版局インド支部の刊行した『ニュー・デリーの千年祭本 (The Millenium Book on New Delhi)』の内容を紹介する形で、計画都市としてのニュー・デリー造営の経緯について、『ザ・ヒンドゥー』が説明していた¹⁴⁾。

2006年には、アンドリュー・ロバーツ (Andrew Roberts) 著『1900年以後の英語諸国民の歴史 (A History of the English-Speaking Peoples since 1900)』が刊行されたのを受けて、同年11月、『ザ・テレグラフ』のステイヴン・ヒュー＝ジョーンズが、同書に関する書評を行った。ヒュー＝ジョーンズは、ロバーツが1911年ダーバーを賛美するかのうように扱っているのは全く時代遅れだと批判した¹⁵⁾。

2007年7月にB・D・ガルガ (B. D. Garga) 著『ラージからスワラージへ—インドにおけるノンフィクション映画 (From Raj to Swaraj: The Non-Fiction Film in India)』が刊行された。同書においてガルガは、1903年と1911年の二度のインペリアル・ダーバーに際して、それらにまつわるイベントを撮影した映画が数多く制作されており、インド社会でノンフィクション映画というジャンルを誕生させるきっかけになったと指摘していた。同書に関しては、『ザ・トリビューン』が2007年8月と2009年12月の二度にわたって書評を掲載している¹⁶⁾。2009年8月には、同年10月に刊行されることになっていた『ニュー・デリー—首都の建設 (New Delhi: Making of a Capital)』を、実際の刊行に先駆けて『ザ・テレグラフ』、『ザ・ヒンドゥー』、『ザ・トリビューン』の三紙がほぼ一週間おきに続けて紹介した¹⁷⁾。

1911年ダーバーを時代背景として利用したり、イベントとしてのインペリアル・ダーバーのありようをヒントにしたりする娯楽小説も現れた。2010年5月には、クリシャン・パト

12) Syed Ali Ahmed, 'Excuse me while I kiss the sky', *The Tribune*, 25 December 2011.

13) 'Living with relics got difficult', *The Times of India*, 30 December 2011.

14) 'The creation of a planned city', *The Hindu*, 11 February 2001.

15) Stephen Hugh-Jones, 'Mission Incurable: Heaven help Britain and speakers of English', *The Telegraph*, 10 November 2006.

16) 'Books', *The Tribune*, 19 August 2007; Rachna Singh, 'Documenting documentary', *The Tribune*, 20 December 2009.

17) 'Ghostly Power', *The Telegraph*, 14 August 2009; 'Finding Dilli on the anvil', *The Hindu*, 22 August 2009; 'Birth of New Delhi', *The Tribune*, 30 August 2009.

ラップ (Kirishan Patrap) が執筆した政治スリラー『デリー・ダーバー (Delhi Durbar)』を『ヒンドゥスタン・タイムズ』が紹介している¹⁸⁾。またヴィタル・ラジャン (Vithal Rajan) が2010年後半から2011年前半にかけて間を置かずに刊行した二つの推理小説、『ザ・ラーズのホームズ (Holmes of The Raj)』と『反逆罪の年 (The Year of High Treason)』を、前者については『ザ・テレグラフ』が、後者については『ヒンドゥスタン・タイムズ』と『デカン・クロニクル』が紹介した¹⁹⁾。

1911年ダーバー100周年に際して、それをテーマとして出版された文献の中で、インド社会、イギリス社会の双方を通じて最も話題になったのは、ジェシカ・ダグラス＝ヒューム (Jessica Douglas-Home) 著『帝国の一瞥 (A Glimpse to Empire)』のようである。ダグラス＝ヒュームの祖母にあたるイギリス貴族家系出身の女性が、当時流行の「レディ・トラベラー」たちに倣ってインドを訪れ、1911年ダーバーを参観していた。その際に彼女が書きとめた覚書や彼女自身が撮影した相当数の写真を、偶然、ダグラス＝ヒュームが入手した。ダグラス＝ヒュームは、20世紀初頭のインド社会、そして1911年ダーバーに関する彼女の祖母の見聞録を、その後のインド社会／イギリス社会の歩みを踏まえて整理し直し、出版した。まず、ロンドンでの同書刊行の受け止められかたを、アミト・ロイが『ザ・テレグラフ』で2011年11月27日に伝えている²⁰⁾。次いで11月30日には、同書の販売をプロモートするためにデリーで開かれた展覧会の模様を、エクタ・マリクが『パイオニア』で紹介した²¹⁾。12月に入ると、『ヒンドゥスタン・タイムズ』、『ザ・ファイナンシャル・エクスプレス』、『ザ・テレグラフ』の三紙が、同書についての書評を掲載した (『ザ・テレグラフ』は二度取り上げている)²²⁾。

12月後半には、既に2008年に刊行されていた『1911年デリー・ダーバー—完全解説 (Delhi Durbar 1911: The Complete Story)』に関する書評を、『ヒンドゥスタン・タイムズ』と『パイオニア』が掲載している²³⁾。また、オールド・デリーの歴史とニュー・デリーの歴史をビジュアルに通観することを目的として、2012年に刊行予定の『デリー—赤い城からレイジナへ (Delhi: Red Fort to Rasina)』の内容を先行的に紹介する展覧会が2011年12月に開かれており、『デカン・ヘラルド』がそれについての記事を掲載した²⁴⁾。

18) 'A riveting read', *Hindustan Times*, 7 May 2010.

19) 'Cracking the code', *The Telegraph*, 26 September 2010; 'Three's company', *Hindustan Times*, February 2011; 'Just Out', *Deccan Chronicle*, 16 February 2011.

20) Amit Roy, 'Eye on England', *The Telegraph*, 27 November 2011.

21) Ektaa Malik, 'A view of the "Tented City"', *Pioneer*, 30 November 2011.

22) Paramita Ghosh, 'Get a peek into Delhi Durbar chronicles', *Hindustan Times*, 1 December 2011; Sukalp Sharma, 'Framing 1911', *The Financial Express*, 4 December 2011; 'From Liah with love', *The Telegraph*, 4 December 2011; Anabel Loyd, 'Elephants and Buttered Toast', *The Telegraph*, 30 December 2011.

23) 'Fresh insight on how New Delhi was created 100 yrs ago', *Hindustan Times*, 15 December 2011; Ektaa Malik, 'It's in the Indian DNA to be organised', *Pioneer*, 21 December 2011.

24) 'From Shahjahanabad to New Delhi in pictures', *Deccan Herald*, 19 December 2011.

インド社会の英字新聞は、1911年インペリアル・ダーバー100周年をどのように回想したのか

ドキュメンタリー、音楽、映画

1911年ダーバーは映像や音楽なども積極的に活用して行われたイベントであったため、それらにまつわって残された事物や記録を素材として同ダーバーを回想しようとする記事も、幾つか現れることになった。2004年にはケーブルテレビ局であるディスカバリー・チャンネルが、イギリス帝国の各地で20世紀前半に撮影された種々のカラー映像を編集し、「カラーで見るイギリス帝国—運命との密約 (The British Empire in Colour: A Tryst with Destiny)」と題する番組を制作していた。その中には1911年ダーバーのありようをカラー映像で撮影したシークエンズも含まれており、2004年7月11日の『ミッド・デイ』が、同日の午後3時から同番組が放送されることを知らせている²⁵⁾。同番組はインド社会で関心と呼んだようであり、2009年2月15日には地上波のテレビ局によっても放送され、その放送時間を『ザ・トリビューン』が伝えていた。

2008年8月には、やはり『ザ・トリビューン』が、英領インド帝国時代のインド人音楽家たちの活動について回想する記事を掲載し、その中では、1911年ダーバーに際してジョージ5世の前で歌唱と舞踏を披露したガウハル・ジャン (Gauhar Jan 1875年生まれ、1930年没) が言及されていた²⁶⁾。1911年ダーバーでのガウハル・ジャンのパフォーマンスについては、『ジ・エイジアン・エイジ』も2010年8月の記事で取り上げている²⁷⁾。

1911年ダーバー100周年が近づいた2011年8月には、1925年に制作され、「アジアの光 (Light of Asia)」と題して公開されたインド映画について、『ザ・テレグラフ』のアミト・ロイが紹介していた²⁸⁾。「アジアの光」は釈迦の生涯を描いた伝記映画であり、ジャイプール藩王からの支援を受けて同国で撮影された。ロンドンでの公開に先立って制作者たちがジョージ5世に宛てて手紙を書いたところ、めでたく「御高覧」ということになった。ジョージ5世が1911年ダーバーでの体験を懐かしんでいたからではないか、とロイは推測している。バッキンガム宮殿での上映中、ジョージ5世は居眠りをしていたが、王妃メアリはその出来栄を称賛した。かくして王室の「お墨付き」を得たからか、同作品はイギリス全土でヒットし、フランスやアメリカでも公開されたが、インドでは公開されなかった。字幕が英語だったせいかもしれない、とロイは推測している。

2011年11月後半には、1911年ダーバーの全貌をカラーで撮影した映画の存在を『ヒンドゥー・タイムズ』が紹介した²⁹⁾。同作品のタイトルは「我らの国王そして王妃とともにインドに行く (With Our King and Queen Through India)」あるいは「デリーでのダーバー (The Durbar in Delhi)」であり、世界でも最も早い時期のカラー映画だった、と指摘している。

25) 'Things to watch', *Mid-Day*, 11 July 2004; 'Television', *The Tribune*, 15 February 2009.

26) 'Melodies on record', *The Tribune*, 13 April 2008.

27) 'Recording the story of a top nautch girl', *The Asian Age*, 18 August 2010.

28) Amit Roy, 'Memoirs of a lost legend', *The Telegraph*, 18 August 2011.

29) 'Delhi, what a capital ideal', *Hindustan Times*, 19 November 2011.

2 インペリアル・ダーバーの「記憶」

イベントとしての1911年ダーバーのありようについての回想

イベントとしての1911年ダーバーのありようを回想しようとする記事は、2000年代後半から徐々に現れ始め、2011年に入ると一気に増加した。まず2004年1月には、21世紀初頭におけるアメリカ合衆国とインドの外交関係、そしてアメリカ合衆国とパキスタンの外交関係は1911年ダーバーの再演のようだと、『ザ・テレグラフ』のマニ・シャンカール・アイヤルが表現していた³⁰⁾。

さらに2007年3月から2011年5月に至るまでの間、『ザ・ヒンドゥー』のR・V・スミスが、ほぼ一年おきに、イベントとしての1911年ダーバーを回想し、それがインド社会にもたらした意味について考察する記事を掲載していた。2007年3月の記事では、インペリアル・ダーバーの会場予定地にあったために会場設営に際して取り壊されることになった、あるキリスト教教会の運命を取り上げた³¹⁾。2009年8月の記事では、1911年インペリアル・ダーバーの際のデリーの状況と、2010年のコモンウェルス・ゲームズ（4年に一度行われる、イギリス連邦諸国のスポーツ大会）を前にしたデリーの状況とを比較している³²⁾。1911年ダーバー100周年を一年後に控えた2010年12月の記事では、都合三度行われたインペリアル・ダーバーを概観した³³⁾。最後に、2011年5月16日の記事では、インド大反乱（セポイの乱）が発生した日（1857年5月11日）と、半年後に迫った1911年ダーバー100周年を結びつける形で考察を行い、現在のデリー市民の中で歴史に関心を抱く人々は、1911年ダーバー100周年をどのように迎えるべきなのか、と問いかけている³⁴⁾。

2011年11月以降、インペリアル・ダーバーのイベントとしてのありようを回想する記事が、各紙の紙面で本格的に登場する。11月6日には、1877年ダーバーはイギリス人たちの虚栄心のためだけに行われたと、『ザ・テレグラフ』のマラヴィカ・カリエカルが批判的に紹介した³⁵⁾。12月7日には、やはり『ザ・テレグラフ』においてスティーヴン・ヒュー＝ジョーンズが、1911年ダーバーが行われた時点でイギリス人たちは英領インド帝国が遠からず滅びるとは全く考えていなかった、と指摘している³⁶⁾。

続いて『パイオニア』が12月11日、12日、13日と三日間にわたって、それぞれ、「歴史上の美しい印刷物（The fine print of history）」、「大ダーバー（The Great Durbar）」、「どのようにして彼らは粉塵と混雑を克服し、夜を輝かせたか（How they beat the dust,

30) Mani Shankar Aiyar, 'Lame Duck Waddling', *The Telegraph*, 28 January 2004.

31) R. V. Smith, 'Faith in the familiar lap of history', *The Hindu*, 5 March 2007.

32) R. V. Smith, 'Screening ugly scars', *The Hindu*, 31 August 2009.

33) R. V. Smith, 'History in shambles', *The Hindu*, 6 December 2010.

34) R. V. Smith, 'Matters of coronation', *The Hindu*, 16 May 2011.

35) Malavika Kariekar, 'For Pomp and Show: The panoply of the raj', *The Telegraph*, 6 November 2011.

36) Stephen Hugh-Jones, 'Living legacy', *The Telegraph*, 7 December 2011.

インド社会の英字新聞は、1911年インペリアル・ダーバー100周年をどのように回想したのか

crowding and lit up the night)』と題して、100年前の『パイオニア』が1911年ダーバーを報じたありようを、そのままの形で採録していた³⁷⁾。

1911年ダーバーの最重要の儀礼が12月12日に行われ、その際に遷都が発表されたことを踏まえて、2011年12月16日の『ミッド・デイ』においてカンチャン・グプタが、1911年ダーバーが行われてからちょうど100年が経過したが、都としてのデリーの歴史はそれよりもはるかに長いはずだと、読者に注意を促している³⁸⁾。12月28日には、1911年ダーバー100周年の年を締めくくるかのように、2011年のデリーは同ダーバー100周年について概して無関心だったと、『デカン・クロニクル』が述べていた。

ニュー・デリー造営

ニュー・デリー造営の経緯について回想する記事も、イベントとしての1911年ダーバーのありようを回想する記事と類似したパターンで紙面に現れた。すなわち、2000年代の後半から徐々に登場し、2011年に入ると一気に増加している。

2002年9月には、1911年ダーバーが開催される直前にインド副王＝総督となり、同ダーバーを大過なく実施した後にカルカッタからデリーへの遷都を差配し、さらに新都ニュー・デリーの造営を開始させたチャールズ・ハーディングについて回想する記事を、『ザ・ヒンドゥー』のズィヤ・ウス・サラムが掲載した³⁹⁾。2006年8月には、1911年ダーバー以後、多くの住民が流入したことで都市としてのデリーの性格が一変し、「コスモポリタン」になった、と『ザ・ファイナンシャル・エクスプレス』が指摘している⁴⁰⁾。また同年9月には、1947年のインド／パキスタン分離独立以前のデリーのありようを回想する記事を『ザ・ヒンドゥー』が掲載し、その中で1911年ダーバーについても言及していた⁴¹⁾。

2007年7月には、ニュー・デリーの造営において、中核的であり、象徴的でもある建築物として念入りに構築されたインド副王宮殿が、現在はインド大統領官邸として利用されるようになった経緯について、『ザ・トリビューン』が説明している⁴²⁾。同年12月には、英領インド帝国の首都になってから現在に至るまでのデリーの歴史を『ザ・ヒンドゥー』のR・V・スミスが概観した⁴³⁾。2010年8月には、ニュー・デリー造営の主要な設計者だったエドウィン・ラッチェンスと1911年ダーバーの関係について、『ザ・テレグラフ』のアミト・ロイが論じている⁴⁴⁾。

37) 'The fine print of history', *Pioneer*, 11 December 2011; 'The Great Durbar', *Pioneer*, 12 December 2011; 'How they beat the dust, crowding and lit up the night', *Pioneer*, 13 December 2011.

38) Kanchan Gupta, 'But Delhi isn't 100 years old!', *Mid-Day*, 16 December 2011.

39) Ziya Us Salam, 'Whose city is it anyway?', *The Hindu*, 5 September 2002.

40) 'The migrant's home', *The Financial Express*, 5 August 2006.

41) 'When balcony was the picture', *The Hindu*, 1 September 2006.

42) 'Palaces of the President', *The Tribune*, 8 July 2007.

43) 'As the mart perks up', *The Hindu*, 10 December 2007.

44) Amit Roy, 'Lutyens Legacy', *The Telegraph*, 29 August 2010.

2011年に入ると、まず『ヒンドゥスタン・タイムズ』が、ニュー・デリー造営の初期段階の状況について回想する記事を1月20日に掲載した⁴⁵⁾。4月10日には、英領インド帝国の首都ニュー・デリーの造営とオーストラリア連邦の新首都キャンベラの造営がほぼ同時に行われていた事実を『ザ・ヒンドゥー』のS・ムティアが指摘し、その意味を検討している⁴⁶⁾。7月12日には、ニュー・デリーの造営に際して建築の実務面で重要な役割を果たしたサー・ソバ・シン (Sir Soba Singh) を顕彰するべきだ、と『ザ・ファイナンシャル・エクスプレス』が提案した⁴⁷⁾。さらに『ヒンドゥスタン・タイムズ』は、1912年のデリーへの遷都を記念する式典で起こった、インド副王=総督ハーディング夫妻暗殺未遂事件にデリー警察がどのように対処したのかを、9月1日の記事で回想した⁴⁸⁾。

1911年ダーバー100周年を目前にした12月に入ると、ニュー・デリー造営に関する記事はさらに頻繁に現れる。まず10日には、1911年ダーバーそのものよりは、むしろ1912年の遷都の意義に重点をおいて論じるべきだとする記事を『デカン・ヘラルド』のカリド・アクターが発表した⁴⁹⁾。ついで11日には、オールド・デリーとニュー・デリーの関係性について、もっと注目するべきだとの主張を『インディアン・エクスプレス』が行い、また、『パイオニア』ではアモン・ナートが、ニュー・デリーは首都としてのパリのありように強い憧れを抱いていたラッチェンスによって設計された、と指摘した⁵⁰⁾。さらに24日には、現場の労働力としてニュー・デリーの造営に携わった多数のインド人男女にについて、『ザ・テレグラフ』のクシュワント・シンが包括的な説明を行っていた⁵¹⁾。

カルカッタ (コルカタ) の運命

1911年ダーバーを契機として遷都が行われたことにより、帝国のエリートたちから取り残される形になったカルカッタの運命についても、1911年ダーバー100周年前後の時期に幾つかの記事が現れた。まず2010年10月には、コモンウェルス・ゲームズを主催し終えたデリーに対してコルカタ市民が感じている「敗北感」について、『ザ・テレグラフ』が取り上げている⁵²⁾。2011年12月に入ると、1911年ダーバーがカルカッタにもたらした変化について、『ザ・テレグラフ』と『デカン・ヘラルド』が具体的に論じる記事を掲載した。まず、12月

45) 'A temporary fixture on permanence', *Hindustan Times*, 20 January 2011.

46) S. Muthiah, 'Tale of two capitals', *The Hindu*, 10 April 2011.

47) 'Let's name Windsor Place after Sir Sobha, PM tells Sheila', *The Financial Express*, 12 July 2011.

48) 'Delhi Police: With you for you, since 1911', *Hindustan Times*, 1 September 2011.

49) Khalid Akhter, 'It's 100 years since Delhi regained power and glory', *Deccan Herald*, 10 December 2011.

50) 'Tale of two cities', *Indian Express*, 11 December 2011; Amon Nath, 'Plaster of Paris', *Pioneer*, 11 December 2011.

51) Khushwant Singh, 'The City from Atop a Hill', *The Telegraph*, 24 December 2011.

52) 'Please Be Patient', *The Telegraph*, 17 October 2010.

インド社会の英字新聞は、1911年インペリアル・ダーバー100周年をどのように回想したのか

11日には『ザ・テレグラフ』のバルン・デが遷都の経緯を回想し⁵³⁾、ついで12日には『デカン・ヘラルド』が、首都としての地位を失ったことがカルカッタという都市の歴史においてどのような意味を持つのかについて、論じた⁵⁴⁾。

さらに2012年1月15日には、『ザ・テレグラフ』が再度、遷都がカルカッタにもたらした余波について論じている⁵⁵⁾。1911年ダーバーの場で遷都を発表した直後にジョージ5世はカルカッタを訪れていたが、その際に国王＝皇帝のために巨大なテントを準備したインド人についての記事を、やはり『ザ・テレグラフ』が1月19日に掲載した⁵⁶⁾。

3 インペリアル・ダーバーとゆかりを持つ人々

ヴィクトリア女王

イベントとしての1911年ダーバーの原型は、ヴィクトリア女王が死去し、エドワード7世がイギリス国王＝インド皇帝となったことを告知するために行われた1903年ダーバーの際に、既に定められていた。その1903年ダーバーをデザインしたのが、当時インド副王＝総督だったジョージ・ナサニエル・カーズンであり、彼は、この代替わりの機会を利用して、亡くなったヴィクトリア女王を、英領インド帝国の「建国の母」としてインド社会の人々に記憶させることも意図していた⁵⁷⁾。そのような背景もあり、1911年ダーバー100周年が近づくにつれて、ヴィクトリア女王について回想する記事も現れた。

2004年4月には、英領インド帝国各地にヴィクトリア女王の像が建てられていった経緯について回想する記事を『ザ・ヒンドゥー』のR・V・スミスが掲載した⁵⁸⁾。2010年2月には、「建国の母」ヴィクトリア女王に捧げるモニュメントとしてカーズンがカルカッタに構築した「ヴィクトリア・メモリアル・ホール」の、その時点での状況について報じる記事を『ザ・テレグラフ』が掲載している⁵⁹⁾。

近時のイギリス王室

1911年ダーバー100周年が近づくにつれて、インド社会の英字新聞には、近時のイギリス王室と同ダーバーのゆかりへの関心も生じた。2005年10月には、チャールズ王太子と結婚してコーンウォール公爵夫人になったカミラが、1911年ダーバーに際してメアリ王妃が着用

53) Barun De, 'Capital shift', *The Telegraph*, 11 December 2011.

54) '100 years since Kolkata lost the crown', *Deccan Herald*, 12 December 2011.

55) Rudrangshu Mukherjee, 'End of an era', *The Telegraph*, 15 January 2012.

56) Soumitra Das, 'Man who built George V marquee, Birla tech museum', *The Telegraph*, 19 January 2012.

57) 本田毅彦「英領インド帝国の「建国の母」を記憶させる試み—ヴィクトリア・メモリアル・ホール（カルカッタ）の消長」『史窓』79号、2022年、119–138頁。

58) R. V. Smith, 'The Queen who was popular', *The Hindu*, 12 April 2004.

59) 'Victoria's secrets: Calcutta revisited', *The Telegraph*, 21 February 2010.

したティアラを身に帯びて公式行事に参加したことを、『ザ・テレグラフ』のアミト・ロイが伝えている⁶⁰⁾。

2009年10月13日には、翌14日に、エリザベス女王がバッキンガム宮殿のボール・ルーム（舞踏室）でボリウッド・ダンス（現代インド映画のセールスポイントの一つである、俳優たちによる群舞）を鑑賞する予定だと、やはり『ザ・テレグラフ』のアミト・ロイが伝えていた⁶¹⁾。そして、その14日には、予定通りにエリザベス女王が宮殿でボリウッド・ダンスを見物したが、その際にダンサーたちが踊った舞台の上には、1911年ダーバーの際に用いられた深紅のヴェルヴェットの天蓋が設えられていたと、『デカン・ヘラルド』が伝えている⁶²⁾。

1911年ダーバー100周年となる2011年12月には、既に触れたジェシカ・ダグラス＝ヒューム著『帝国の一瞥』の刊行を記念してロンドンで開かれた展覧会のために、その開会を、エリザベス女王の従弟であるケント公爵が宣言したことを、『ザ・テレグラフ』のアミト・ロイが伝えている⁶³⁾。

2012年1月には、エリザベス女王の三男であるウエセックス伯爵の夫人がバーレーン王家から宝石を贈られたことがイギリス社会で問題化していると、『ジ・エコノミック・タイムズ』が報じた。1911年ダーバーの際にメアリ王妃はパティアラ藩王国のマハラニ（王妃）から宝石を贈られたが、このような振る舞いは現在では批判を免れない、と指摘していた⁶⁴⁾。

藩王たち

三度のインペリアル・ダーバーにおける「主役」は、イギリス国王＝インド皇帝だったが、イベントとしてのインド社会への効果という点から見ると、国王＝皇帝と並んで重要な役割を果たしたのが、インドの藩王たちだった。そのため、1911年ダーバー100周年が近づくにつれて、藩王たちが1911年ダーバーに実際にどのように関わったのか、そして近時の藩王たちの動向の中に同ダーバーとのゆかりを見出すことができるのかなどについて、インド社会の英字新聞では関心の高まりが生じた。

2001年10月には、1911年ダーバーに参加した際のハイデラバード藩王（ニザーム）の振る舞いについて回想する記事を『ザ・トリビューン』のK・R・N・スワミが掲載した⁶⁵⁾。またスワミは2002年2月に、やはり『ザ・トリビューン』において、三度のインペリアル・ダーバーに際しての複数の藩王たちの振る舞いを回想する記事も掲載している⁶⁶⁾。

1903年ダーバーでは、イベントとしての視覚的効果を高めることを目的として、その主宰

60) Amit Roy, 'Uneasy sits Delhi crown on Camilla', *The Telegraph*, 27 October 2005.

61) Amit Roy, 'Bollywood dance in Buckingham', *The Telegraph*, 13 October 2009.

62) 'Bhangra, Bollywood dancers rock Buckingham Palace', *Deccan Herald*, 14 October 2009.

63) Amit Roy, 'India return', *The Telegraph*, 18 December 2011.

64) 'Gifted baubles for British royals do not go unquestioned any more', *The Economic Times*, 9 January 2012.

65) K. R. N. Swamy, 'The prince who behaved like a pauper', *The Tribune*, 14 October 2001.

66) K. R. N. Swamy, 'Matters of protocol', *The Tribune*, 3 February 2002.

インド社会の英字新聞は、1911年インペリアル・ダーバー100周年をどのように回想したのか

者であるインド副王＝総督カーソンが藩王たちに巨象を連れてデリーに集合し、それらに座乗してパレードに参加することを要請した。しかし1911年ダーバーでは、1903年ダーバーの際にはまだほとんど見られなかった自動車が活用され、多くの藩王たちがイギリス製の高級乗用車ロールズ・ロイスを購入し、それらを持参した。マイソール藩王もその一人であり、2003年1月24日の『スター・オブ・マイソール』では、K・ジャヴィード・ナイームが、同藩王の所有していたロールズ・ロイスにまつわるエピソードを記事にしている⁶⁷⁾。

それから8年後の2011年8月には、くだんのロールズ・ロイスをマイソール藩王家がロンドンでオークションにかける予定であることを『インディアン・エクスプレス』と『デカン・ヘラルド』が伝えた⁶⁸⁾。そして結局、マイソール藩王のロールズ・ロイスは、カタールのロールズ・ロイス輸入業者が購入することになったと、『中近東・北アフリカ・フィナンシャル・ネットワーク』が12月29日に伝えている⁶⁹⁾。

2010年3月には、1911年ダーバー99周年にあたって、当時の藩王たちの子孫がデリーに集合したことを『ザ・トリビューン』のジョティ・ライが伝えた⁷⁰⁾。また2010年11月には、近日中にジョドプール藩王家の王子の結婚式が行われ、インド各地の王族たちが集まる予定だが、その規模は1911年ダーバー以降最大のものになるはずだと、『ザ・テレグラフ』のラキー・ロイ・タルクダールが伝えている⁷¹⁾。

1911年ダーバー100周年直後の2012年1月には、グジャラート州のヴァードーダラ（英領インド帝国時代にはバローダ藩王国の首都だった）において、1911年ダーバーでのバローダ藩王の振る舞いを撮影した映像が公開されると、『ザ・タイムズ・オブ・インディア』が伝えていた⁷²⁾。バローダ藩王は、イギリス国王＝インド皇帝ジョージ5世に対して忠誠を誓う、儀式中の最も重要な場面で不敬な動作をしたのではないかと、イベントの直後から厳しい批判を浴びていた。改めてそのシーンを収めた映像を検証することにより、同藩王の名誉を回復しようとする意図があったと考えられる。

タゴールと「ジャナ・ガナ・マナ」

2011年8月26日の『パイオニア』でヒランマイ・カルレカルが、1911年ダーバーとインドの高名な詩人ラビンドラナート・タゴールの関わりについて論じた記事を掲載した⁷³⁾。カル

67) Dr. K. Javeed Nayeem, 'Over a Cup of Evening Tea: A drive through good times and bad times', *Star of Mysore*, 24 January 2003.

68) 'Mysore king's Rolls-Royce up for auction in UK', *Indian Express*, 24 August 2011; 'Wadiyar Rolls, Tipu pendant to be auctioned', *Deccan Herald*, 24 August 2011.

69) 'Qatar-Doha showroom acquires a piece of Rolls-Royce history', *The Middle East North Africa Financial Network (MENAFN)*, 29 December 2011.

70) Jyoti Rai, 'Royal scions meet for 'auld lang syne'', *The Tribune*, 14 March 2010.

71) Rakhee Roy Talukdar, 'Rolls Royce ride ends 37-year wait for royal bride: Clawback Prince leaves home in car that ferried two generations', *The Telegraph*, 17 November 2010.

72) 'Rare film on Sayajirao to be screened in city', *The Times of India*, 11 January 2012.

73) Hiranmay Karlekar, 'Nationalism of Tagore', *Pioneer*, 26 August 2011.

レカルによれば、タゴールは、同ダーバーが行われる直前の数年間に高揚していたベンガル分割反対闘争に対して、むしろ批判的だった。

さらに、1911年ダーバー100周年直後の2011年12月末には、現在のインド共和国の国歌である「ジャナ・ガナ・マナ」をタゴールが作詞・作曲したのは、実は1911年ダーバーを契機としてであったことを『デカン・クロニクル』、『グレートター・カシミール』、『デカン・ヘラルド』の三紙が指摘した⁷⁴⁾。

ネルー＝ガンディー王朝

近時のインド社会では、その政治状況を論じる際に、インド国民会議派を批判する目的で、「ネルー＝ガンディー王朝」という表現が用いられることが多い。これは、1947年8月に英領インド帝国が解体してインド／パキスタンが分離独立を果たして以降、インドの歴代首相の系譜において、一定の家系に属する人びとが複数回現れたことを示すために用いられている。すなわち、マハトマ・ガンディーの愛弟子であったジャワハルラル・ネルー（1911年ダーバーが行われた時にはイギリスのケンブリッジ大学に在学しており、ダーバーに招待された父親〔モティラル・ネルー〕のために、ロンドンの高級紳士服店で礼服を注文して父の下へ送っていた）が、独立後のインドの初代首相となり、その娘のインディラ・ガンディーは、父の死後、1960年代後半から80年代前半にかけて首相の地位に就いた。また、インディラが暗殺された後には、インディラの次男であるラジブ・ガンディーが1989年まで首相の地位にあった。さらにそのラジブが1991年に暗殺された後には、彼の妻だったソニア・ガンディーが、首相の地位には就かなかったものの、与党である国民会議派の「陰の指導者（オーナー）」として政権運営に強い影響を及ぼした。ここ数年は、ソニア・ガンディーから、彼女とラジブの間に生まれた息子ラフル・ガンディーへ国民会議派のリーダーシップが移されつつある。ただし同王朝の「ガンディー」という語は、マハトマ・ガンディーに由来するのではなく、インディラが結婚した男性の姓が「ガンディー」だったことによる。

マンモハン・シンを首相とする国民会議派内閣がインドの政権を握っていた2008年8月の時点で、『ヒンドゥスタン・タイムズ』は、「デリー・ダーバー」という表現を「インド連邦レベルでのエスタブリッシュメント」という意味で用いており、これは実際には、ネルー＝ガンディー王朝のことを指していた⁷⁵⁾。また、やはりマンモハン・シン内閣が続いていた2011年2月の時点でも、「デリー・ダーバー」という表現を「インド社会の政治的エスタブリッシュメント」の意味で『インディアン・エクスプレス』のC・ラジャ・モハンが用いて

74) 'Indian national anthem completes 100 years', *Deccan Chronicle*, 27 December 2011; Sirshendu Panth, 'Jana Gana Mana ... completes a century', *Greater Kashmir*, 28 December 2011; Saibal Gupta, 'Jana Gana Mana encompassed India', says, Tagore kin', *Deccan Herald*, 28 December 2011.

75) 'Jharkhand political activity to shift to Delhi', *Hindustan Times*, 19 August 2008.

インド社会の英字新聞は、1911年インペリアル・ダーバー100周年をどのように回想したのか

いる⁷⁶⁾。

2012年1月には、マーガレット・サッチャーをテーマとする伝記映画がイギリスで制作／公開されたのを受けて、インドでもインディラ・ガンディーについて同じような伝記映画が作られることがあるだろうか『エコノミック・タイムズ』が問い、次のように自ら答えていた。「我々自身の『鉄の淑女』の生涯—そして、彼女が属するクランの他の幾人かのメンバーたちの生涯—は、映画だけでなく、総合的な、リミッター解除の [no-holdsbarred] 伝記を要求しているが、全く現れそうにない。」⁷⁷⁾ この記事の筆者が、「彼女 [インディラ・ガンディー] が属するクラン」と呼んでいる集団が、「ネルー＝ガンディー王朝」であることは、言うまでもない。

結びに代えて

1911年ダーバー100周年は、インド社会の英字紙においてどのように扱われたと総括するべきだろうか。インド人ジャーナリストたちは100周年を比較的強く意識しており、彼らの手によって紙面上で頻繁に取り上げられた、と言ってよいと思われる。そのようであった理由としては、2011年という年が、同イベントをインド社会が想起するための、おそらく最後の機会になると記者たちが意識していたことが大きかったのではないか。

しかし、それをどのように想起すべきなのか（どのように想起するのが適当なのか）については、ある種の戸惑いが記者たちの心理にあったように思われる。彼らの間では、政治的イベントとしての1911年ダーバーを回想するよりは、同ダーバーを契機として行われたカルカッタからデリーへの遷都の意義を問おうとする姿勢が顕著だった。

インペリアル・ダーバーそのものはコロニアルなイベント／帝国のイベントに過ぎず、今日のインド社会があえてそれを想起／記念する価値は乏しい（無い）と、記者たちの多くは判断したのであろう。他方、遷都100周年に関しては、インド近現代史上の二つの時代（英領インド帝国の時代と、インド共和国の時代）の連続と非連続について、記者たちを含むインド社会の多くの人々が考えを巡らせる機会になるべきだとみなされた、と思われる。

さらに、現在の時点から振り返って見れば、2011年前後の時期は、現代インド社会にとっての新たな画期が近づいていることを、人々に感じさせる雰囲気は漂ってもいた⁷⁸⁾。すなわち、東西冷戦が終焉してから20年が経過していたが、インド社会では、グローバリゼーションへの関与に消極的な国民会議派と、それに積極的に関わろうとする勢力との間での対抗関係が、幾度かの連邦レベルでの政権交代を重ねながらも、手詰まり状態に入っていた。しかし、

76) C. Raja Mohan, 'He dared to break down silos, change national security discourse', *Indian Express*, 3 February 2011.

77) 'Britain's Iron Lady has been dissected on film; India's won't ever be', *The Economic Times*, 7 January 2012.

78) Sevanti Ninan, 'Managing' India's media', *aljazeera.com*, 22 November 2013.

2011年前後の時期から、インド人民党内部において、ナレンドラ・モディによるリーダーシップの掌握が決定的になった。

こうしたインド社会の変化を機敏に察知しながら、また、英領インド帝国の時代とインド共和国の時代の連続／非連続も意識しつつ、インド社会の行く末を展望しようとしていたのが、コルカタ生まれの保守派のジャーナリスト／思想家、スワパン・ダスグプタ（Swapan Dasgupta）だった。2014年に誕生したモディ政権においてダスグプタは主要なブレインの一人になり、今日に至っている⁷⁹⁾。21世紀初頭の時点で、そのダスグプタが、1911年ダーバー100周年の到来にも言及しながら、インド社会の主要な英字新聞に活発に寄稿していた論説記事を検討することを今後の課題としたい。

79) Meera Nanda, *The God Market: How Globalization Is Making India More Hindu* (New York, NY: Monthly Review Press, 2009), pp. 134–139; Manisha Basu, *The Rhetoric of Hindu India: Language and Urban Nationalism* (Cambridge: Cambridge University Press, 2017), pp. 139–147; Swapan Dasgupta, *Awakening Bharat Mata: The Political Beliefs of the India Right* (Gurugram, Haryana: Penguin Random House India, 2019), pp. 1–35.